

日付:2016年8月28日／聖書:ローマの信徒への手紙8:18～27

## 説教:「呻きをもってとりなす方」

私たちには、様々な「苦しみ」があるもの。その人自身でなければその辛さは分からない。教会の「主の祈り」の中に「我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」という言葉があるが、「試み」とは苦しみがおとずれることを言う。ここでは、その試みを克服させてください…とか、悪に勝たせてください…と言った言葉はない。それは私たちが、試みとか、悪というものに、打ち勝つことは中々出来ることではない…ということ的前提にしている。「主の祈り」は、そのような弱さを持つ人が、神の御手の中にあることを覚えて歩むこと、神が“見ておられる”神が“伴なってくれる”という歩みの中で、「悪より救い出したまえ」と願うのである。

アブラハムの物語の中にハガルという女性の話がある。アブラハムの妻サラには子がなかった。サラには女奴隷ハガルいた。そのハガルによって子を授かりたいとアブラハムに願った。夫アブラハムは妻の通りにした。そして身ごもると…ハガルは女主人であるサラを軽んじてしまう。すると、サラはハガルにつらく当たり、彼女はサラのもとから逃げ出した。行くあてもなく荒野をさまざまに迷って、死を待つのみとなってしまう。その時、主が彼女に会う、「ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」、ハガルは「女主人サラのもとから逃げているところです」と答えると、主は「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい」と言う。そして主はハガルを祝福する…。ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ(わたしを見てくださる神)です」と答えた。ハガルは女主人サラのもとへ帰って行った。…この話は、結局、元の生活に戻り、試練の中に、試みの中に身を置くことになった。ハガルにとって以前と違うことは、女主人の冷酷な扱いと荒野の孤独な状況の中で、自分を見てくださる神に出会うことが出来たということ。決して一人ではない、共に歩んでくださる神がおられることをハガルは知る。

26節「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」とある。霊とは、神様のこと。神が「うめきをもって執り成す」と言う。「呻く」とは苦しむことを意味する。聖書が示すキリストの姿がそうだという。私たちが礼拝する“神”は、「呻く神」、「苦しむ神」、人を執り成すために神ご自身が、私たちが味わっている苦しみを、誰にも分かってもらえない呻きを、神は聞き取ってくださり、共に苦しみ、共に呻く。これが神の姿である。キリストの十字架には、そのような意味がある。私たちもこの神に出会っていきたい。(神谷)